

イスラエルとパレスティナ人の和解は可能か？ ～その歴史と展望～

1. 古代以来のユダヤ教徒迫害の歴史

ディアスポラ モーセによるエジプト脱出（前13世紀）・・選民意識（『申命記』7：6～8；9：4～8）・・律法授与・・それは民が祝福のうちに留まり「幸いに生きるため」（『申命記』6：20～24、『詩篇』19：8～11）・・「寄留の外国人と共に」（10：17，18；12：18；26：11；24：20，21；27：19）・・12部族の連合体・・古代イスラエル統一国家（前c1030～931）・・第一神殿建設・・分裂王国＝北王国イスラエル（10部族）と南王国ユダ（2部族）・・前者はアッシリアにより滅亡（前722）・・後者はバビロニアにより滅亡（前586）・・「ユダの民」（ユーダイオイ）と呼ばれた・・ペルシア王キュロスによる「解放令」（前537）・・第二神殿建設・・亡国は律法違反のゆえ→律法遵守が祝福の条件とされる→ユダヤ教の誕生→律法主義（613項目の戒律）・・律法への情熱・・義人と罪人・・マカバイ王朝・・ギリシアとローマによる支配・・メシア（マーシアハ＝頭に油を注がれた者）待望（＝ギリシア語ではキリストス＝キリスト）・・複数で人間・・ユダヤ教こそ「キリスト教」。

エレッツ・イスラエル 神から与えられた約束の地・・『ヨシュア記』のイデオロギー・・ジェノサイド（民族皆殺し）・・律法主義から発生した傲慢な「選民」意識・・第一次ユダヤ戦争（後66～70）・・ディアスポラ（離散の民）・・第二次ユダヤ戦争（131～135）・・さらなる離散・・ガラリヤやヒジャーズ（アラビア半島西海岸）まで・・エレッツ・イスラエル感情が強化される。

キリスト教との軋轢 ユダヤ教イエス・キリスト派の誕生・・メシア（「救済者」、「救世主」ではない）・・パウロによりヘレニズム世界への進出・・イエスの十字架と復活による救済に集中・・イエスの「主」化（唯一・絶対・排他的・最後のキリスト）、(kyrios=キューリオス)・・（『コリントの信徒への手紙1』8：4～6）・・ドグマ化（dogma=dokeo=seem, appear）（『ガラテヤの信徒への手紙』1：9以下）・・イエス・キリスト派の追放（90）・・キリスト教は「新奇で邪悪な宗教」・・ローマ帝国による迫害・・コンスタンティヌス大帝による公認（313）・・帝国の宗教となる（392）・・立場の逆転・・異端やユダヤ教への迫害・・ヨーロッパ全土への離散→改宗の強要→迫害とゲッター化。

イスラームの勃興 ムハンマドへの啓示（610）・・ユダヤ教徒、キリスト教徒は「啓典の民」で特殊・・同じ神と祖先・・ユダヤ教徒への期待と失望・・ユダヤ教徒との確執・・「6信」（①アッラー、②天使、③啓典、④預言者、⑤来世（アーヒラ）、⑥予定（カダル）と「5行」（①信仰告白（シャハーダ）、②礼拝、③喜捨（ザカート）、④断食、⑤巡礼）・・その明快さ、単純さ、普遍性・・急激な膨張・・「聖地の占領」・・十字軍・・ユダヤ教徒の虐殺・・イスラーム文化の興隆・・ジクリット・フンケ『アラビア文化の遺産』。

2. 近代以降の反ユダヤ主義

宗教改革・ルネサンス→啓蒙主義 ルターは最初ユダヤ教徒に好意的であったが、キリスト教に改宗しないので憎悪を強める・・改宗しなければ疎外と迫害・・「ベニスの商人」的ユダヤ人像の形成・・しかし啓蒙主義と共に、次第に新しい意味の「ユダヤ教徒の解放」が叫ばれ始める・・レッシング『賢人ナータン』・・啓蒙主義以来、知識人の間で「宗教批判」が芽生える・・スピノザの追放・・ユダヤ教側の「ハスカラー運動」。

同化運動 assimilation・・ドイツを中心に「教養」に基づく「ユダヤ問題の解決」が目指された・・「思考における急進性」・・「キリスト教唯一絶対主義」の崩壊・・ユダヤ教徒からユダヤ系意識へ・・しかし民族意識の高揚と反ユダヤ主義の台頭。

国民国家の台頭 nation-stateの出現・・・その問題性・・・「同化」運動の幻想性・・・そのアキレス腱としてのnationalism・・・大衆の反感・・・土地に根付かぬエリート意識の挫折。

反セム主義の台頭 19世紀末にanti-semitism・・・Wilhelm Marrの「セム人種」という似非生物学的観念(1879)・・・「アーリア人種」妄想の始まり・・・「血と地の神話」→決定論的妄想・・・キリスト教への改宗は解決でなくなる・・・「ユダヤ系」の始まり・・・プロイセンを中心に「ドイツ文化の敵＝ユダヤ人」という妄想・・・しかしヴォルテールやカール・マルクスも共有・・・「大衆を搾取する資本家」観・・・E・ドリュモン『ユダヤ人のフランス』(1886)、H・S・チェンバレン『19世紀の基礎』(1886、ドイツで出版)

『シオンの長老の議定書』 The Protocols of the Elders of Zion・・・1800年代、ロシア秘密警察による偽書・・・ヘンリー・フォードが信じ込み、1920年代に広げる・・・ヒトラーは大歓迎・・・(第二次世界大戦後ではアラブ世界の指導者たちもこれを流布した。)・・・ノーマン・コーンはこれを『ジェノサイドの認可書』と呼んだ。

ドレフュス事件 ユダヤ系フランス軍大尉アルフレッド・ドレフュスへの冤罪(1894)・・・国論を二分・・・エミール・ゾラなどの知識人たちの批判・・・テオドール・ヘルツルもこの事件に立ち会った。

3. シオニズム運動の台頭

シオニズムの誕生 ウィーンを中心に活躍したジャーナリスト、テオドール・ヘルツル(1860～1904)・・・ロシアでのボグロムの連発や、ドレフュス事件に遭遇して「シオニズム運動」を進展させる・・・『ユダヤ国家』・・・第一回シオニズム会議(1897、バーゼルで)・・・204人の代表者・・・翌年には394人・・・彼は、トルコのスルタンと交渉したが失敗・・・「公法」に基づく移民を訴え、イギリスやフランスの要人と掛け合う・・・イギリスは第6回シオニズム会議(1906)で「ウガンダ案」を提起・・・可決されたが強い反対運動で挫折・・・苦難のうちに客死(44歳)

ヘルツルの時代的限界 「公法」によってという原則と、帝国主義的面とが交錯・・・「われわれはここに、アジアに対するヨーロッパの障地を築き、野蛮に対する文明の前哨としなければ・・・」・・・「土地なき民に、民なき土地を」・・・アラブのキリスト教徒も無視。

宗教的シオニズム ラビ・アブラハム・イサアク・クック(1865～1935)・・・「約束の地」パレスティナへの「帰郷」を提唱・・・1909年にパレスティナに移住・・・政教分離を軸に宗教的・民族的シオニズムを提唱

キブツとモシャヴ 「アリヤー」と呼ばれる移民運動の進展・・・「ハルツィーム」(パイオニア)運動・・・農地開墾の重労働に従事・・・「農業主義」・・・最初のキブツ、デガニア(1910)・・・新しい共同体理念・・・社会主義的・・・次第に戦略的意味をも強化。

自警団の必要 最初は、ユダヤ系の農場も、アラブ系の農場も、牛・馬泥・穀物棒などに対する自衛のために、ロシア以来の自警団(ハショメール)を創った。これは後には「ハガナー」へと発展・・・「終わりなき復讐のパターン」に陥らないように自戒していた。

4. 第一次世界大戦の渦中で

どちら側に付くか? 第一次世界大戦が始まったとき、多くの優秀な青年たち(ベングリオンなど)は、トルコ法などを学ぶためにトルコにいた。敵性民族とされ逮捕された・・・アメリカのシオニストは、彼らを救出し、連合側が付くように説得した。

ハイム・ワイツマンは、イギリスのために爆弾製造用のアセトンを発明し、連合側を支援・・・トルコ・ドイツ軍による「アルメニア人殲滅」を見て、さらにこの方向を確認・・・主として情報の領域で貢献した。

ユダヤ軍団の結成 主としてジャボチンスキーの努力で、ユダヤ軍団を結成(1917)。カナダやアメリカからも志願者が続出。

フセイン・マクマホン書簡 (1915・10) トルコ領であったパレスティナのアラブ人をトルコから離反させ、ドイツ側に付かせないために、パレスティナにアラブ人の国家を形成することを認めたもの・アラビアのローレンスの時代。

サイクス・ピコ協定 (1916・5) 戦後、イギリスがパレスティナを、フランスがシリア・レバノンを支配するという秘密協定・戦後ヴェルサイユ条約において、ロシア、イタリア・日本などが承認。

バルフォア宣言 (1917・11) イギリスの外相アーサー・バルフォアによる宣言・Jewish National Homeの建設を承認・1922年には、国際連盟によって、イギリスのパレスティナ委任統治のための条件として承認された。

これらは相互に矛盾する「3枚舌」的な不誠実な対応。イスラエル側も、アラブ側も激怒した。

トルコの支配の終わり 1917年11月、イギリス軍はガザに待機していたが、クリスマスの2週間前にエルサレムに無血入城。トルコの支配が終った。

アラブ人とユダヤ系の相克の始まり ワイツマンは、アラブの指導者エミール・ファイサルと会い、平和共存を確認しようとした。トランス・ヨルダンは、フセインの支配の下に入った。そして両者は、従兄弟同士だと述べた。

5. ユダヤとアラブの不幸な歪みと振れ

アリヤーの始まり 「アリヤー」(特にエルサレムに登って行くこと)・そこからパレスティナへの移民・入植を意味するようになる・主にロシアからの第3アリヤーが始まり、ユダヤ系の移民が飛躍的に増加した。

アラブ住民との不和の原因 イギリスの役人たちは、どちらにも都合が良いような振る舞いをしたが、アラブ的な派手で賄賂などを媒介にするやり方を好み、論争的なユダヤ系を好まなかった・エフェンディ(アラブ人地主)は、フェラヒン(アラブ人小作人)がユダヤ系入植者に雇われるのを好まず、ユダヤ系への反感を深めていく(もっとも彼らはユダヤ系に高く土地を売ることもしたが)。

アラブ側の民族主義の台頭 ヘルツルは、19世紀的な国民国家の範疇で考えたが、アラブの民族意識は、20世紀のアジア・アフリカ民族主義の範疇・「アル・ファタハ」(青年アラブ党)が1911年に結成・ユダヤ側はアラブ人を「貪欲な地主か、単純労働者」くらいに見なす傾向があった・フランスは、このことを誇大視して反ユダヤの空気を煽った・アシケナズィーム(本来は「ドイツ」に由来)とセファラディーム(本来は「スペイン」に由来)の含意の変遷・「アラブ系」に対する「ヨーロッパ系」の侮蔑と差別。

エミール・ファイサルによる錯誤 トランス・ヨルダンを与えられたファイサルは、ユダヤ系に好意的で「教育あるアラブ人は、シオニスト運動に同情的で、ユダヤ系の帰郷を歓迎する」として、アラブ穏健派を過大評価した。

イギリスのバルフォア宣言無視の姿勢 サイクスらイギリスの首脳は、バルフォア宣言を事実上無視する指示を与えていた・またファイサルをパレスティナの王にするという提案までした・戦後、ユダヤ系がエジプトとロシアから移民してきた時、この傾向がさらに強められた。

ハーバート・サミュエルの重大な誤り ユダヤ系の閣僚サミュエルは、ユダヤ系を宥めるために「高等弁務官」に任命された・アラブ側から中立でないと思われるのを恐れ、アラブ人の平等の権利を認めるユダヤ国家でなければならないと強調した・「アラブを無視すれば、自ら虐殺を招き寄せる」と警告・現実性の乏しい表面的言説。

ハジ・フセイニーの登場 イギリスは、フセイニー家のハジ・アミン・アル・フセイニーを、新しい官職「グランド・ムフティ」(イスラーム最高法官)に任命・彼は熱狂的な反ユダヤ主義者で、煽動家、それで穏健派を「裏切り者」と呼んで攻撃、暴動を始めた・サミュエルは、熱狂的な反シオニスト主義者、A・T・リッチモンドを高等弁務官の助言者に任命するよう説得・フセイ

ニーは最後には、ヒトラーの「最終解決」案に賛成し、強力に支持するようになり、遂にはドイツに移り、最後にはイラクで客死した。

6. イスラエル建国を促した諸事件

ヘブロンでの虐殺 ムフティのフセイニーによって組織された反ユダヤ暴動が、由緒ある町ヘブロンで起こり（1929）、ユダヤ地区で67人が殺され、60人ほどが負傷した。ユダヤ系住民はヘブロンを去らざるをえなくなった。

イギリスの白書 1939・5・17・・・バルフォア宣言に矛盾するもの・・・郷土を否定し、移住を10年間に75,000人に、しかもアラブ側が認めた場合のみに限定・・・ヒトラーの政策を暗に支持するものと思われた・・・イギリス外交の「4枚舌」・・・「今や世界には二種類の国々しかない。ユダヤ系を追放したがっている国々と、ユダヤ系の入国を認めない国々である」（ワイツマン）。

ストゥルマ号の悲劇 ルーマニアからの亡命者769人を乗せた「ストゥルマ号」がイスタンブールの外側で座礁したのに上陸を許さず、2ヶ月後、外洋に引き出して沈没させた。2人助かっただけ。

難民キャンプ イギリスは、被追放者(displaced people=DPs)を「特別キャンプ」に入れ、パレスティナ行きを許可せず、遂にはキプロス島の難民キャンプに強制収容・・・2万人が極悪の条件下で拘留され続けた。

エクソダス1947の悲劇 イギリスは、難民4500人を乗せた「エクソダス号」を駆逐艦6隻で監視し、パレスティナまであと12マイルのところまで、撃沈しようとした・・・ヨーロッパへ戻し、棍棒をもって強制的にドイツに送還した！・・・ヨーロッパに25,000人のユダヤ難民がいることが判明。

国連の分割案決議 1947・11、国連は分割決議案を可決・・・イスラエルは承認したが、アラブ側は拒否・・・不公平な土地配分。

イスラエル建国宣言 1948・5・14、イギリスの委任統治が終わり、同日ベングリオンは、イスラエルの独立を宣言・・・これには「神」という言葉は用いられていなかった・・・イスラエル国家（メディナット・イスラエル）と命名・・・エレッツ・イスラエルに従って・・・「社会主義的・民主主義的」国家を標榜していたが、「イスラエル」という命名は、不可避的にユダヤ教を「国教」とするような「祭政一致」的国家への傾きを内蔵していた・・・アメリカは、直ちに承認。アラブ6ヶ国は、ただちに「侵入」を開始。

デイル・ヤシンの悲劇 1948・4・9・・・イスラエル軍による大量虐殺・・・ベギンが指揮・・・真相は究明されつくしていない・・・アラブ人の脱出を促し、多くの難民が生まれた。現在ではこの村は「クファル・シャウル」と呼ばれ、精神病院が建てられ、地図からも抹殺されている。(Cf. サブリ・ジェリス『イスラエルのアラブ人』の告発)

軍隊指揮上の問題 命令伝達はヘブライ語で・・・誰何(すいか)はヘブライ語で・・・事実上アラブ系を拒否・・・「カシュルット」の導入・・・ユダヤ系以外は事実上閉め出される傾向。

7. 現代史におけるシオニズム

近代の国民国家の植民地主義・帝国主義と不可分の関係

- ①その歴史と不可分
- ②真のインターナショナリズムからの逸脱 national homeの欺瞞性・・・政治的なナショナリズムと不可分
- ③差別構造が不可避 Jewish National Homeの願望的・幻想的性格・・・土着のパレスティナ・アラブ人を結局は無視し追放・抑圧する構造が不可避。
- ④幻想的な社会主義 パレスティナ・アラブ人を実質的な「イスラエル国民」として扱うことの現実的な無理。
- ⑤土地収奪の不可避性 アラブ系を追い出すほかない構造。コロニーの労働者として扱うことにならざるを得なかった。(アーロン・コーエン『イスラエルとアラブ世界』、1962)。

8. イスラエル建国宣言以後の問題

いわゆる「独立戦争」に始まる戦争 アラブ6ヶ国側は、不法な独立を粉碎する意図・・・「ユダヤ人の最後の一人まで地中海に投げ込め」がスローガンに・・・ユダヤ側は「絶滅戦争」に必死の抵抗・・・イスラエルは全人口の1%、6,000人の戦死者・・・「強いイスラエル」の出現・・・ホロコーストへの「従順」の反省と自戒・・・その方向が持つ矛盾。

イスラエルの人口増大 「アリヤー」の波の連続・・・ヨーロッパのホロコーストの生き残り・・・ロシアのポグロム・・・アラブ地域からの亡命者の流入・・・急激な人口増大・・・不安の増大。

強国イスラエルの誕生 五つの戦争に勝った・・・しかし「レバノン侵攻」は支持を得られなかった・・・占領地での居座り・・・ヨルダン川西岸、ゴラン高原、エルサレムの東側の旧市街地、ガザ地区、・・・「大イスラエル主義」(grand design)。

PLO(パレスティナ解放戦線) 1964・1結成・・・ヤスィル・アラファト議長・・・テロ活動が中心。

パレスティナ人の出現 「パレスティナ民族」の新しさ・・・単なる「血」による民族主義ではない・・・「約束の地」イデオロギーに対する大アラブ主義・・・アラブ諸国も、パレスティナのアラブ人に充分対応してこなかった・・・「大イスラエル主義」の問題性。

アラブ難民の発生とアラブ人口の激減 1948年の戦争後、アラブ系の人口は12万に激減・・・国連分割案による「ユダヤ国」内だけでも開戦時は50万人のアラブ系がいた・・・「パレスティナ国」と指定された地域には、72万5千人がいた・・・イスラエルはその半分を占領→30～50万人の難民を生み出した・・・6日戦争前に国連難民救済機関UNRWAに登録された難民の数は、124万6千人！

「悪法」による追放と抑圧 「不在者財産の没収法」(1950)、「緊急法125条」(1949)、「閉鎖地域法」、「安全地域」宣言、「公益のための土地獲得法」(イギリスによる1943に由来)等々・・・「法治国家」の欺瞞性。

「約束の地」イデオロギーの問題性 これは無理な神話に基づく空想的主張・・・新しい「アールア条項」？

9. イスラエル・ユダヤの未来

イスラエル国家理念とその未来 神話に依拠することの無内容さ・・・イエホシャファト・ハルカビ『イスラエル・最後の刻(とき)ーユダヤ国家に未来はあるか』(第三書館)・・・「大イスラエル」というグランド・デザインの無理・・・二つの接近、①国家の思想的・現実的・倫理的アイデンティティは？(外国人支配の構造は必ず腐敗する)、②国家の生存条件は？(人口論、軍事論からも根源的検証が不可欠、国粋主義や宗教的過激主義は自己崩壊に導く)・・・政策変更が不可避・・・現実的政策の模索が不可欠。

被害者から加害者への頹落の可能性 イブラヒーム・スース『ユダヤ人の友への手紙』(岩波書店)・・・その訴えの切実さ

ユダヤ的英知への訴え 「ユダヤ教徒がわたしの律法に従わないよりは、私を見捨てるほうがましである」(『エルサレム・タルムード』、「ハギガー」1:7)・・・ラビ・ヒレルの叡智(「汝の隣人を自分自身のように愛せ。自分が他者にして欲しくないことは、自分もするな。これが律法のすべて。その他一切は注釈にすぎぬ」)・・・悪しきドグマ性の克服・・・「ノアの子らの守るべき事柄」・・・「倫理法」『レビ記』19:10～18・・・

ユダヤ教徒・ユダヤ系の自負と、その危うさ 本来の「選民」理解への「立ち帰り」(テシュヴァー)の要・・・ユダヤ教も含め、あらゆる宗教の相対性の認識の重要性・・・レッシング『賢人ナータン』の今日的教訓・・・「食物規定」や「割礼」「祭日」の問題性についての再考の要・・・もちろん同じことは、キリスト教やイスラームにも妥当する。特に近代以降、帝国主義的な蛮行を行ってきた西欧米列強(そしてそれに追随してきた日本も)のラディカルな自己批判の不可避性・・・特に現代日本の「新しいナショナリズム」への傾斜の問題性。

<高橋和夫『アラブとイスラエルーパレスティナ問題の構図』(現代社現代新書)>